人恋うる柿本人麻呂を追って

柿本光明

鴨山の岩根し枕ける
われをかも知らにと妹が待ちつつあらむ　（二二三）

「歌の聖」と称えられた万葉歌人、柿本人麻呂の辞世の歌である。

『万葉集』には、古くは仁徳天皇の時代から、近くは八世紀半ばに至る約四〇〇年間の歌が収められている。しかし、舒明期（六二九年即位）以前の作品は、いずれも伝誦性が濃厚で、実質的にそれぞれの時代の作品とは認めがたい。

歌の種類には、長歌・短歌・旋頭歌（五・七・七・五・七・七の六句体の歌）があり、総数四五一六首全二〇巻に及ぶ大歌集である。そのためすでに編集されていた歌集をもとに大伴家持が光仁朝に再編集したといわれている。この時代はまだ仮名文字が創り出されていなかったので、漢字を用いた複雑な表記法が考案された。その中で、漢字を表音文字として用いたものを「万葉仮名」とよび、後代の仮名文字の基礎となった。

『万葉集』の時代を第一期＝六七二年（壬申の乱）以前、第二期＝六七三～七一〇年（平城遷都）、第三期＝七一一～七三三年（山上憶良の死）、第四期＝七三四～七五九の四期に分けてみた。

斉明朝前後の代表歌人のなかで最大の作者は額田王であるが、ここではそれよりも、もっと専門歌人らしい性格をもった万葉歌人たちの群像をさぐろう。万葉の第二期藤原京時代を代表するものは柿本人麻呂と高市黒人、第三期の和銅・養老時代を代表するものは山辺赤人、大伴旅人、山上憶良、第四期の天平時代を代表するものは大伴家持である。

古代最大の歌人が柿本人麻呂であることは多くの衆口の一致するところである。だが人麻呂の人物、伝記について知ることのできるのはあまりにわずかである。したがって人麻呂の人間像を描くことはきわめて困難であるが、なおかつ人麻呂をさぐろうとすれば、どのような手がかりがあるだろうか。

◎万葉の大和

大和には群山あれどとりよろふ天香久山
登り立ち国見をすれば　国原は煙立ち立つ海原は鷗立ち立つ
うまし国ぞ蜻蛉島大和の国は　（舒明天皇、二）

この国見の歌は大和の象徴的な讃歌となっている。いまならまだこの

古代の風土に思いをはせることができる。

大君は神にしませば
あまぐものいかづちの上にいほらせるかも　（二三五）

天皇、雷岳においでました時の柿本人麻呂の作れる一首である。

◎万葉の山背・近江

何処にかわれは宿らむ
高島の勝野の原にこの日暮れなば　（高市黒人、二七五）

琵琶湖の西、高島のあたり、寒々とした静寂と漂泊感が漂う。ましてや極官にあり、栄華を誇った藤原仲麻呂がこの地で斬られたことを想起すれば、世の無情をさえ感じる。

恭仁・紫香楽・大津と山背や近江の方の万葉時代の都は、湖の岸辺に打ち寄せる波の雫にも似て、いずれも長つづきしなかった。

◎万葉の摂河原

摂河泉（摂津、河内、和泉）の歴史は古く、難波の地の殷賑も長くつづいた。大伴の御津の浜辺や鶴が妻呼ぶ難波潟まで来ると、生駒山が見え、その向こうは大和の国。帰朝の遣唐使や築紫帰りの官人も、安堵した気持ちになる。

住吉の岸の松が根うちさらし
寄せ来る波の音のさやけさ　（一一五九）

また、摂河泉には中国・朝鮮半島から渡来した人々が多く定住し、その周辺に生産技術の発展や仏教文化の華が咲いた。

◎万葉の越の国

越の国の万葉を語る時、越中国守時代の大伴家持をさしおくことはできない。越中守になるまえの約一五年間に一六五首、越中守時代の約五年間に二一四首、それ以後の八年間に一〇〇首を作るその余裕が大仏建立の宮廷讃歌を生み出す。

天皇の御代さかえんと
東なるみちのくの山にこがね花咲く　（四〇九七）

◎万葉の瀬戸内

山陽沿海の歌の大部分は、定住者のそれでなく、中央派遣の人々のものである。

瀬戸内の船旅はひと月にも及んだ。舟底の浅い木船の身を委ね、人力で潮流の変化に抗して進まねばならなかった。遣唐使も、遣新羅使人らも、太宰府へ赴く官人や防人も、望郷や妻恋いの情をつのらせながら、みなこの苦労を味わった。

吾のみや夜船を榜ぐと思へれば
沖辺の方に楫のおとすなり

（三六二四）

◎万葉の遠つ朝廷太宰府

太宰府は政庁の正殿・中門・南門を結ぶ延長線上の大路を中心とする、左郭・右郭の府域にそれぞれ東西一二坊、南北二二条の号坊をもっていた。防備設備として、椽城・大野城を左右に配し、前面に水城をおく。

蘆垣の隈処に立ちて吾妹子が
袖もしほほに泣きしぞ思はゆ

（上総国市原郡上丁刑部直千国、四三五七）

東国からはるばると召されて太宰府防衛の任についた防人の歌である。

人麻呂の伝記に関しては、天武・持統・文武の三代にわたって活躍したことは確かであるが、天武九年（六八〇）には、宮廷に出仕していたらしい。人麻呂の長歌は同期における他の歌人たちの作に比べ、きわだって字余り字足らずの不整音句は少なく、五七の音数律による定型確定に果たした役割は大きいといわれる。そうした長歌の定型を活用して、人麻呂は天皇讃歌や皇族の挽歌を多数作ったし、旧都の荒廃を悲しむ歌や妻と別れる時の歌、そして妻の死を哀傷する挽歌などに多くの佳作を残した。もちろん短歌においてもみるべきものが多い。

私が柿本人麻呂に興味をもちはじめたのは中等学校の三年生頃だったと思う。当時、高山樗牛の『滝口入道』、それに昭和一〇年頃から朝日新聞に連載された『宮本武蔵』などと同時に『万葉集』なども読みあさるうち、柿本人麻呂の名前に気付き、わが柿本家とのつながりを探るようになった。

柿本氏の本拠について古来より大和地方に二つの候補地があげられる。一つは大和添上郡櫟本付近（現在の天理市）である。もう一つは大和国北葛城郡新庄町柿本である。新庄町は古くから柿本神社が存在することから由来するからである。

明石市に正一位柿本大名神の扁額のかかった拝殿がうっそうとした松林に囲まれている。参道の石畳の両側には文学歌碑が点在し、万葉の歌聖に詣でる喜びがこみあげる。拝殿前の狛犬は、台に宝暦四年（一七五四）銘が刻まれており、播磨では最も古いとされている。

人麻呂は、天武・持統天皇に仕えていた頃、石見から都へ帰る途中、必ずここに立寄り、この道の風景を愛したそうだ。

前述、万葉の瀬戸内で遣唐使も、遣新羅使人らも、太宰府へ赴く宮人や防人の『万葉集』の歌の中にこの船旅の歌がある。その瀬戸内の中で人麻呂は次のように詠んでいる。

武庫の海のにはよくあらし漁する
海人の釣船波の上ゆ見ゆ

（二五六、三六〇九）

玉藻刈る敏馬を過ぎて夏草の
野島が崎に船近づきぬ

（二五〇）

淡路の野島が崎の濱風に
妹が結びし紐吹きかへす　（二五一）

ともし火の明石大門に入らむ日や
こぎ別れなむ家のあたり見ず　（二五四）

天ざかる夷の長路ゆ恋来れば
明日の門より大和島見ゆ　（二五五）

『万葉集』に詠まれた明石は歴史的な見所が一杯ある。なかでも山陽電鉄「人丸前」駅北へ徒歩数分、人丸山頂に旧県社、柿本神社がある。土地の人は「人丸さん」と呼ぶ。祭神は柿本朝臣人麻呂。古来、わが国に於いて、歌聖人麻呂を神と仰ぐ社はあるが、この明石でも早くから祀られてきたようだ。

弘仁二年（八一一）各地を巡錫中の弘法大師が明石に来て、人麻呂山（現明石城）に揚柳寺（月照寺）を建立した。その後、和歌を好んだ寺僧覚証は、人麻呂の霊の明石に留まるのを感得したとして、寺の背後に小祠を建てた。これが柿本神社の起こりと伝えられている。仁和二年（八八七）だったという。

一七世紀初期の元和の頃、神社（月照寺も）を藩主の小笠原忠真が明石城を築くに際し現在の場所に遷し、社殿を新築した。のち、人麻呂一千年祭の享保八年（一七二三）には「正一位柿本大明神」の神位神号を宣下されて、女房奉書を賜わった。以後、人々から崇敬され、寄進も多く、後桜町天皇（一八世紀中期）宸翰短籍と仁孝天皇（一九世紀前期）宸翰及び一座短籍、各数十葉は、国の重要文化財に、森狙仙筆「猿の絵」（一八一四）は市の文化財に指定されている。

人麻呂のすばらしい万葉歌は数多く残されている。その中には宮廷御用歌人として作った儀礼的な歌もあるにせよ、大きく美しく、激しい抒情の歌の数かずは千年の歳月を越えて、今なお人を魅了してやまない。

ほのぼのと明石の浦の朝霧に
島かくれゆく舟をしぞ思ふ　（『古今和歌集』羇旅・四〇九）

しきたえの袖かえし君
玉垂の越野に過ぎぬ　またも逢はめやも　（一九五）

『万葉集』を代表する歌人・柿本人麻呂は日本人の魂をやさぶるミステリアスな人物として知られている。人麻呂の生涯をたどるとき出誕の地として有力な石見（島根県）を忘れることはできない。

益田市には柿本人麻呂神社が二社ある。一つは益田市戸田にあり、いま一つは益田市高津にある。前者は人麻呂の出生を記念して建立され、後者は人麻呂の死後、鎮魂のために建立したものである。出生と死没に当って両方とも神社が建立されたのはたいへん珍しいことであり、この二つの柿本神社はいずれも大規模な社で、道端に勧請されているような

小祠ではない。それだけに地元民の人麻呂に対する尊崇の度合いは高いものがあり、語り継がれ、人麻呂伝承が明らかに住民の間に生きている証しでもある。

安政六年（一八五九）生れの私の祖父（昭和一三年没）が柿本家の先祖は大和の国だといっていた。私が仕事の関係で大阪にいたときそのルーツをたどってみた。『古事記』によれば、柿本族は孝昭天皇の皇子天押帯日子命を始祖とし、和珥族、小野族、櫛代族、春日族を同族としている。小野族は大和国小野の地を、櫛代族は和泉国櫛代を、春日族は大和国春日の地を本拠とし、仁徳天皇の御幸の際、糟を積んで垣としたほどに栄えたので糟垣臣の姓を賜わり、後年これを春日に改めたという。

春日、小野、櫛代の三族は次第繁栄し、石見国美濃郡にはるばると上陸したのである。小野族は小野に上陸し、小野天ノ多祀阿豆委居命神社を建立してその祖神を祀った。同様に春日族は春日の地に拠って天石勝神社を建立し、櫛代族は久代に移住して櫛代賀姫神社を建立している。これらの種族は移住後もたえず中央の大和国との連携を計り、石見国に文化の灯をともした。益田市内にある須久茂塚、小丸山古墳や鵜ノ鼻古墳群はこうした種族の発展を如実に物語るものである。

須久茂塚は櫛代賀姫をまつる神社がある久城台地の中央部にある。江戸時代の『石見名跡考』『石見古事談』にみられるように、昔長者がすくもを盛り上げて築いた小山であると信じられていた。この頃、須久茂塚は凡そ五世紀に造られたものと思われ、円墳と方墳が両方から前庭をさしのべた形の巨大で珍しい未発掘の前方後円墳である。主墳の後円部は二段構えで丘頂は九m、基底の径は五八mに及び、陪塚（径四m、高さ二m）を備えている。

小丸山古墳は、附近の宅地造成地から三角縁神獣鏡が昭和四七年に出土した。この古鏡は三世紀に中国（魏、晋時代）で制作されたもので、文様などその技法が優れている。これは古代大和朝廷が全国を統一する過程で同盟・従属関係を結んだ地方豪族に与えられたものとみられる。

鵜ノ鼻古墳群は益田市の東海岸の日本海に突出した岬にあって眺望がすばらしい。数十基の古墳群でいずれも小型の墳丘古墳であるが、その数においては他にひけをとらない。

山陰本線を浜田より益田に向かって走る時、車窓に映る海浜の風景は素晴らしいの一語につきる。天下一品といってもよかろう。石見一帯の海岸は山が海に押し出していて、その山がまさに海に落ち込む崖縁をうねうねと線路が続く。砂浜、浦、奇岩、岬と風景は目まぐるしく展開し、人の眼を楽しませてくれるが、益田平野にはいると風景は一変し、暢びやかな田野に、また、遠望される薄青の山脈に石見野のもつほのかな艶が、海の景とは違った穏やかな解放感を投げてくれる。

益田平野の西部は平野を迂回した山脈が低く滑らかな稜線を引いて海に落ち込んでいる。高津川畔から望む景はまた格別で、広大な河原を渡ってくる微風に吹かれながら水豊かな川面に映るそうした山々の色は何んともいえず好ましい。益田平野はその昔海であったという。益田川、高津川の両河川の暴威は益田平野をあばれまくり、海から吹き寄せて来る風のため吹上げの砂丘となっているので、日本海に注ぐ川は例外なく

川の流砂と卓越風が運ぶ漂砂とで河口は埋没し、西から東にのびる砂州のために河口は極めて狭くなり、一歩内にはいると満々とした水量を誇る河口湖となっている。この河口湖は広く、特に高津川の場合は柿本人麻呂の「石川に雲立ち渡れ」という和歌がうなずける広大さである。

山陰本線益田駅の西隣、戸田小浜駅で降りると「柿本人麻呂生誕の地」とかいた説明板がある。その前を歩いて国道九号線に出て、しばらく東に向かって進むと、今度は南に向う小径に沿って山ふところにはいる。そこが柿本人麻呂の出生地であり、これが益田市の郊外の戸田にある柿本神社である。のどかな田園風景のなか小高い丘の中腹にある社殿は、うっそうとした森に囲まれ、樹々から漏れる光を受けて一種神秘的な雰囲気を漂わせている。『語家（語り部）綾部氏家系』によると、

綾部氏家其先、出づる所詳ならず。初め大和に住し、柿本氏に仕え、氏の石見に下らるるに際し、陪従して美濃部小野に住し、世々語部と称し、柿本氏仕う。柿本其語家の女を嬖幸して、一男を挙げられ、其児幼にして父を喪へるを以て、語家これを養育したりき。これ柿本朝臣人麻呂なり

とある。つまり、大和に住んでいた綾部家は柿本氏に仕えていたが、後年柿本氏の支族が石見に下った時、これに従って下向し、美濃郡小野に代々語家として住みついた。のち柿本某は語家の女を寵愛して柿本人麻呂が生まれたという。また、語家伝説として『人丸秘密抄』には、

人丸は天武天皇の御時三年八月三日に、石見戸田郷山里という所に、語ノ家命という民の家の柿本に出現する人なり。其歳二十余。家名尋問に答云、我は家なし。来る所もなし。父母もなし。知行もなし。只和歌の道のみ知れりといふ。

とあるように、神化された感じがあって、このまま受け入れることは難しい。このように歌人としての人麻呂が神化されたことで、平安時代以降、室町時代にわたる歌人がいかに人麻呂を崇拝していたかがわかる。それはやがて人麻呂の影供となり、超現実的なものとして象徴化されるのである。また、『戸田柿本神社旧記』に、

人麻呂おひおひ成人なし給ふに従ひ芸術の道おろかなく御名中国に高く聞えおはしましぬ。その頃嘉多良比の許へ七十許りの老翁日毎に来り人麻呂に書を授けまた互に歌をよみ詩を作り或は弓馬の術を教へ、日傾けば何処ともなく帰り去りける。

と少年時代に嘉多良比の下で文武に励んだと記してある。「嘉多良比」は語家綾部氏を指している。

綾部家では語家の代りに、可多良比、賀多羅為、加多羅井という文字を使っている。もともと、小野臣、和珥臣から猿女を祖とする語部を出したという伝説がある。この両氏よりこうした語家を本職とするものが出たのも一重に両氏が発民して来たことを意味するもので、かねて鎮魂

を主とし、天語（神語）を職とした猿女と同じように、これら小野、和珥両氏も種族の繁栄ぶりを語り継いだものであろう。人麻呂の作った壮大な歌群から推しても、そこには先祖の、いや累代にわたった苦闘の経験が伝承されていて、それが人麻呂の血脈に浸透し　例え即興的に歌ったものであっても、ちょっとした風物に触れた場合でも、営々として受け継いだ種族の血潮があふれて表現されるのである。

大体、語部は巫女をもって代々世襲されてきた。『古語拾遺』に猿女が天鈿女の後継者として神楽を奉仕したとあるのをみても、これが神事への語りとして女性の職分となったと思われる。人麻呂はこのような巫女の伝統的な語りを聞かされて少年期を過ごしたものであろう。

柿本人麻呂が生まれたのは、おそらく大化年間（六四五～六四九）と思われる。私は、青年期に柿本人麻呂は石見から近江朝廷に出仕したものと考えるが、有間皇子の変や百済の役は、年少だった人麻呂にとってはさほど実感はなかったであろうが、壬申の乱（六七二）は青年期に達していたとみられるので衝撃だったと思われる。

壬申の乱が終り、律令国家の基盤が確立されるころ、人麻呂はすでに都で、持統・文武両朝の宮廷歌人として次第に頭角を現わし、天皇の御幸にもしばしば同行し、旅先の叙景を雄渾に歌いあげた。

ささなみの志賀の辛崎幸くあれど
大宮人の船待ちかねつ　（三〇）

山川もよりて奉ふる神ながら
たぎつ河内に船出するかも　（三九）

英虞の浦に船乗りすらむおとめらが
珠裳の裾に潮満つらむか　（三六〇一）

妻もあらば採みてたげまし佐美の
山野の上のうはぎ過ぎにけらずや　（二二一）

特に長歌で傑出しており、高市皇子の死を悼んだ挽歌、石見の国から上京するおり妻を思って作った作品など、長歌の芸術性を完成させたといわれる傑作を数多く残している。慶雲二年（七〇五）国司として石見国高津に赴任、死の年まで京と石見を行き来した。

君がため浮沼の池の菱採むと
わが染めし袖ぬれにけるかも　（一二四九）

国引きの神話で知られる三瓶山。その山麓には伝説を秘めた浮布池があり、旧名佐比売山のなだらかなスロープと女性的な稜線のこの山を、人麻呂は優しく見つめていたのであろう。江津市の南三キロ、江の川の鉄橋上流にみえる島の星山（四七〇m）は、人麻呂の歌った高角山といわれ、眺望のよいところで、ここは人麻呂が歩いたと伝えられる万葉の

古道もある。

石見のや高角山の木の間より
わが振る袖を妹見つらむか　（一三二）

人麻呂は旅先の景を情熱を持って歌い上げた「雑歌」や、皇子、皇女の死を気宇壮大に詠んだ「挽歌」から、万葉の息吹きを感じることができる。また、愛する妻との別れを痛切に歌う「相聞」には、人麻呂の内奥が感動的に盛り上がり、妻を残していくせつなさが表現されている。これからも人麻呂の歌は、万葉をひもとく人々の心を魅了し続けていくことだろう。

和銅元年（七〇八）ごろ、鴨山で冒頭の歌を詠み没した。死の直前に入間の限りない哀感がよく表現されている。鴨山には諸説あり、斎藤茂吉の鴨山説（邑智町）をはじめ、江津、浜田亀山、益田説と論が分かれている。

歌人斎藤茂吉は、人麻呂終焉の地〝鴨山〟を求め続け、苦心研究の末、湯抱温泉にある鴨山をその地とした。近くの丘には「人麻呂がつひの命ををはりたる鴨山をしもここと定む」と刻まれた歌碑が立っている。

万寿三年（一〇二六）に発生した大地震と、それに伴う大津波で沈んだと伝えられる高津川河口沖の鴨島。人麻呂辞世歌にある鴨山はここではないかといわれている。昭和五二年には海底調査が行われ、梅原猛は『水底の歌』を発表した余勢を駆って、この暗礁は地震より海底に消えた鴨島であることは間違いないといっている。

この秋のあとに四首の挽歌群がついている。これらの歌によって、人麻呂は晩年大和国から生まれ故郷とみられる石見国に帰って死んだことがわかる。

でも鴨山はどこであろうと
空が広い
それは地球の丸さを感じさせてくれる
抜けるような青さを競うように
海は青い、はてしなく青い
それは人の心を貫き通すような青さだ――
人恋うる人麻呂を追って
海岸線に立つと、懐かしい風が頬をなでる
日本海の匂いだ
気がつけばこぼれるほどの夕焼けだ
透きとおるほど洗われた心に
かの万葉歌人の感傷がじわりと染みていく
時はまた悠久の流れを復唱しはじめた――

――益田の海岸にて――

（注）歌の下の番号は『万葉集』の番号。
「ほのぼのと明石の浦の～」だけは『古今和歌集』から採った。